



製作・監督・脚本＝ハンダン・イベクチ／出演＝ディラン・エルチェティン／シュ克蘭・ギユンギョル／フュスン・デミレル／I・ハック・シェン（アニメーション配給／2001年トルコ映画／120分）

両親が殺されて孤児となった5歳のクルド人の少女ヘジャルと、元判事でトルコ人の老人ルファトとの間に、使用を禁止されたクルド語とトルコ語、という言葉の壁を超えて、少しずつ心の交流が……。トルコで公開禁止とされた話題作の日本上陸だが……。

🎬 少女ヘジャルは5歳のクルド人

少女ヘジャル（ディラン・エルチェティン）は、5歳のクルド人。村が襲撃され、両親が殺されて孤児になったヘジャルは、同じ村出身のエブドウ（I・ハック・シェン）に連れられて、トルコのイスタンブールの親戚の家に預けられた。ところがそこは、クルド人分離独立派の拠点だったため、武装警官隊に襲われ、銃撃戦の末に親戚一家は皆殺しとされた。

戸棚の中に隠れていたため難を逃れ1人廊下に立つヘジャルは、アパートの隣家に招き入れられた。そこには、妻と死に別れたトルコ人の75歳の元判事ルファト（シュ克蘭・ギユンギョル）が1人暮らしをしていた。

🎬 テーマは少女と老人の心の交流

ルファトは、ヘジャルの様子を見て、とりあえず、その世話をすることに。しかし、トルコ語しか話せないルファトには、ヘジャルのしゃべるクルド語がさっぱりわからない。ところが、ルファトの家に通ってきている家政婦のサキネ（フ

ユスン・デミレル)には、これがわかる様子。そしてサキネは、ヘジャルとクルド語でしゃべっているところを発見され、クルド人であることが判明した。

ルフアトは、サキネにもヘジャルにもクルド語を使用することを禁止し、ヘジャルにトルコ語を教えこもうとしたが、ヘジャルは容易に心を開かないため、2人は反発し合い、ケンカの連続。サキネがいなければ、どうにもならないような状況の毎日となった。

エブドゥを訪ねたルフアトは……？

ルフアトは、ヘジャルの服のポケットに入っていたメモを頼りに、ヘジャルをひきとってもらおうべく、エブドゥの家を訪れた。しかし、エブドゥの家には、既に多くの子供たちが避難し、窮屈そうに暮らしていた。これを見たルフアトは、訪問の目的を告げることもできず、そのまま帰路に。この日を境に、ルフアトのヘジャルに対する気持と対応が大きく変化した。

すなわち、ヘジャルに対して可愛い服を買い与え、サキネにクルド語を教えようのように頼み、ヘジャルに対して自ら心を開いていくようになったのだ。

そんな中、ヘジャルとルフアトの間には、次第に心の交流が……。

使用禁止とされたクルド語

トルコ共和国は1923年に成立した国。もともと、トルコ人とクルド人は、何世紀にもわたって平和に共存してきたが、このトルコ共和国の成立によって、政府勢力とクルド人を中心とした反政府グループとの対立が生まれるようになったとのこと。

また、クルド人はアラブ人、ペルシャ人と並ぶ中東地域における三大先住民族の1つだが、トルコ共和国では、1923年の建国直後から1991年まで、クルド人がその母国語であるクルド語を使うことが禁止されていたとのこと。

これは、トルコで1924年に成立した憲法が、「トルコ共和国に暮らす全住民に対して、宗教と人種の区別なしに、同胞としての“トルコ人”とみなす」と定めたことよって、トルコ共和国にはトルコ民族とトルコ語しか存在しないという「宣言」をしたためだ。そして、1991年にクルド語の使用禁止を定めた法律の1

つがようやく廃止され、私的な場でのクルド語の使用は解禁されたものの、公的な場では依然禁止のまま、とのこと。

トルコ共和国とクルド語をめぐるこんな背景事情の勉強が、この映画の理解のためには不可欠だ。

上映禁止と訴訟

この映画は、トルコ文化庁の許可を得て撮影されたが、トルコ国内で公開5カ月後に上映禁止とされた。これに対して、女性監督のハンダン・イペクチが訴訟を提起し、6カ月後に勝訴したものの、今度は監督個人が告訴され、実刑判決となった。しかし、半年後に判決は却下され、再上映が許可されることになった、とのこと。

以上はパンフレットに書かれていることから得た情報だが、こんな背景事情を勉強すれば、この映画の価値も一層より理解できるというものだ。

ヘジャル役の少女は？

この映画でヘジャルを演じたのは、150人の子供の中から抜擢され、映画初出演となったクルド語を全く知らず、読み書きも全くできなかったという当時5歳半の少女。ところが、何と彼女は15日間でクルド語のセリフを全部覚えてしまったとのこと。

大きな目と分厚い唇、そして頬のふっくらした丸顔で、格別美人ではない(?)が、時々見せる可愛い笑顔が強く印象に残る女の子。このディラン・エルチェティンの演技が、この映画の出来に大きく寄与していることはまちがいない。

2004(平成16)年6月18日記